

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦 2023年（令和5年）2月27日

一般財団法人 櫻田 會
理事長 増田 勝彦 殿

研究者 明治大学政治経済学部教授
小西 徳應

第40回（令和3年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

足尾鉍毒事件をめぐる政治過程—第2次鉍毒調査会を中心に—

A study on the Second Investigating Committee of Ashio Copper Mine Incident

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

The final purpose of this study is to find out the facts which the Japanese Government and the offending company Furuwaka Mining did in the process of Ashio Copper Mine Incident. It is essential to analyze the Second Investigating Committee on the incident because the decisions by the Committee made Yanaka-village in Tochigi prefecture to die for diverting public attention from the problem, and decisions directed to settle down the Incident.

Prior to finding out the fruits of the Committee, I tried to disclose the background of the Government set up it. Making clear the reasons of the Government's behavior, we will be able to understand the real political process.

I took two approaches. One is to figure out the necessity of copper around 1900, specifically the needs in electronics and in armament for the preparation of Wars against China and Russia. The other is to focus on the public opinion on the Incident. For the first point of approach, though it is in a midstream of survey, I could collect much data of the quantity of consumed copper. And for the second, I analyzed a diary of a common farmer of Saitama prefecture visited Yanaka-village and the affected area. It showed how people had been interested in the Incident.

These facts will show the necessity the government protect Ashio Copper Mine while propitiating the public feelings.

※研究の目的・研究方法・意義（和文 600 字以内）

本研究は 1902 年に設置された第 2 次鉱毒調査会を手掛かりに、足尾鉱毒事件において政府が何を論じていたのかを明らかにするものである。同調査会の決定により、栃木県下の谷中村が廃村に追い込まれるとともに、鉱毒事件が終局に向けて動き始めたことから、この調査会について調べることは十分に意味がある。

だが大きな働きをした委員会だけに調べるべきことは多数ある。そこで今回は、甚大な被害が発生しているにもかかわらず、なぜ政府は鉱業を継続させようとしたのかを明らかにするため「銅の需要状況」を調べるとともに、盛り上がる反対運動の実態を明らかにすべく、当時の言論界と埼玉県在住の一農民の被害地調査記録を手掛かりに分析を行った。つまり、政府にとっての銅の重要性を担保するためにも、いかに国民をなだめようとしたのかを実証しようとした。

銅は日清・日露戦争を戦う上で不可欠な軍需物資であり、蒸気機関車から電車に移行し始めていた当時の鉄道事業(富国強兵のためにも重要)にとって不可欠なものであった。様々な資料でその実態を明らかにした。

※研究経過と結果の概要 (以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる)

代議士を辞めた田中正造が 1901 年 12 月 10 日に天皇へ直訴したことを契機として、それまでも社会の耳目を集めていた足尾鉱毒事件は一段と社会問題化し、足尾銅山の鉱業停止に関心がいっそう集まることとなった。同時にその時期は、日清戦争とその後の三国干渉を経て、対露感情が極めて悪化し、「臥薪嘗胆」のスローガンを打ち破る対応、すなわち対露戦争が不可避になりつつある時期であった。そうした中で、1902 年に設置された第 2 次鉱毒調査会は、被害民と国民の不満を抑え、各種鉱業、とりわけ産銅業を継続・拡大させて、武器製造や本格化しつつあった武器製造の高度化と大量化、および電線製造による電線網の全国的展開と鉄道網を回る使命を担うものであった。

このことを実証的に解明することを目的としたが、コロナ禍もあり、国立公文書館の利用が自由にならない懸念が大きいことから、以下の 2 点に着目して分析した。一つは、埼玉県小川町在住の一農民が、被害地をめぐった記録の分析である。当時は田中正造や新聞の呼びかけもあり、学生らや社会運動家らの現地視察が活発に実施されていた。他にも出版社の企画による文筆家らも現地調査をし、それが出版されていた。そうした商業ベースのものは別として、ほとんど記録が残されていない。今回の分析で、同じ農民として何をいかに見聞したのかを知ることができただけでなく、広く、いかに当時の国民に足尾鉱毒事件が受け止められていたのか、またこれまでの研究では明らかにされてこなかった、被害地の「視察者受け入れ態勢」ともいべき実態を明らかにすることができるものとなった。翻って見れば、それらは国家に(銅山を温存させることを前提とした)国民懐柔策を採らせる背景となるものであった。もう一つの分析対象である、「銅の役割」は、明治維新直後に重要であった外貨獲得手段、貨幣制度創設のための「銭」に使用する目的での価値は低減していき、戦争の高度化が進むにしたがい、弾丸等の兵器製における材

料としての意味合いを急速に増大させるものであった。とりわけ、日清戦争後の戦後経営においてロシアを仮想敵国とした軍備拡張の中、世界的にも総力戦体制が意識され始める段階で、兵器製造体制がいかにつくられたのか、実際に日露戦争でどれだけの武器弾薬が使用されたのかを解明した。あわせて、蒸気機関から電気に動力源が変わり、鉄道網・電信網などの整備状況と共に、それらに使われる電線製造の実態も明らかにした。これらは、政府が特定の役割を持たせる意図で第2次鉍毒調査会を発足させたことを証明する大前提となるものである。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

現段階では関係雑誌が休止していることから、明治大学内で発行されている雑誌に掲載する予定である。ただし、現地の調査日記については、その社会的位置づけを明らかにするため、記録を著した農民の素性について調査を終了したあとの発行となる。

銅の使用状況についても大学内の研究雑誌に掲載することを予定しているが、兵器については、弾丸に使われる銅の割合など、技術的な確認を終えたのちの発表となる。

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。